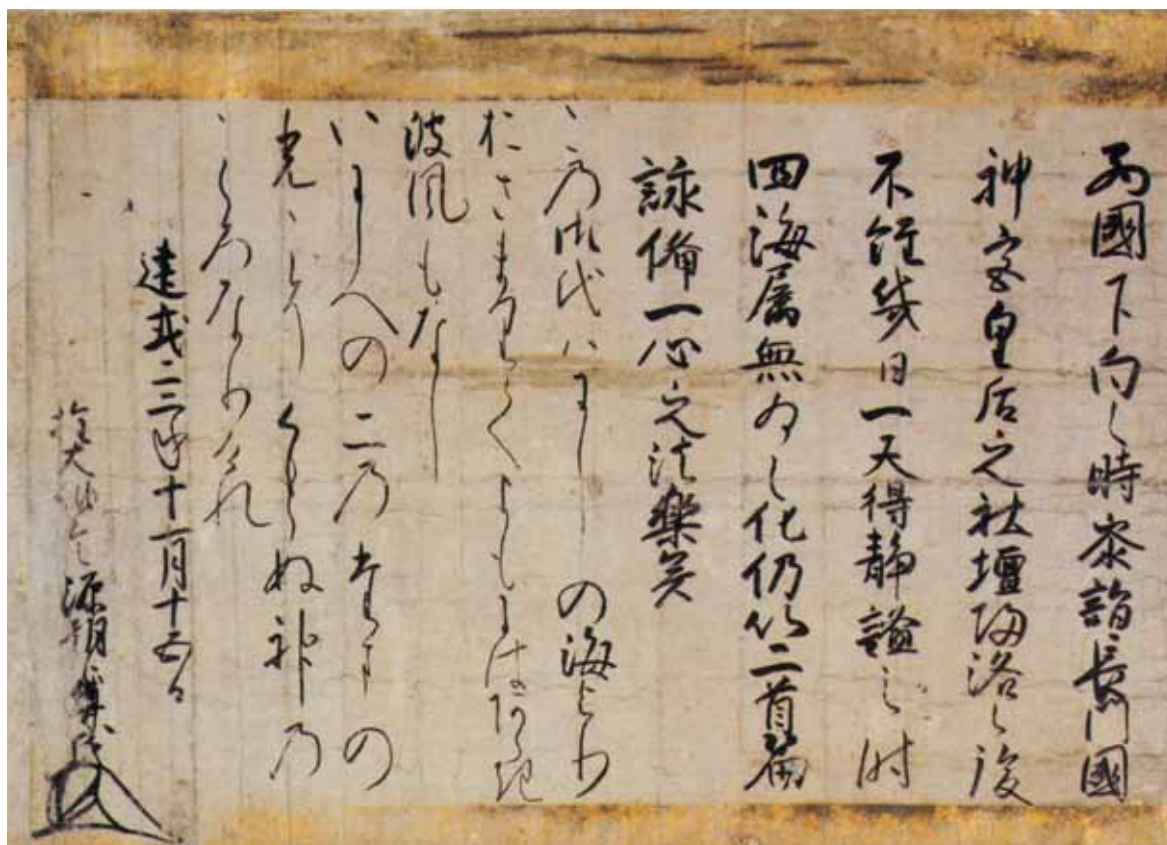


山口県史だより

第23号 / 平成18年10月

特集 和歌・連歌から見る中世の社会



足利尊氏筆「^{とよらのみや}豊浦宮法楽和歌」(下関市忌宮神社蔵)

特集 和歌・連歌から見る中世の社会

万葉集の昔から、古今集・新古今集の時代、明治時代以降の短歌の革新運動の時代を経て、現代に至るまで、和歌（短歌）は、日本人の自然観や美意識などを表現してきました。「百人一首」で遊び、優雅なお正月を過ごされるお宅も多いのではないかと思います。

今回は、日本の文芸を代表する和歌や室町時代に盛行した連歌から、中世の社会の一面を探ってみたいと思います。

神社に奉納された和歌

表紙の写真は、足利尊氏が下関市の忌宮神社に奉納した和歌です。尊氏は、建武三年（一三三六）後醍醐天皇方に敗れ、一旦、九州に下りました。その間に、忌宮神社に戦勝を祈願したのです。その後、勢力を挽回して京都に上った尊氏は、建武四年に感謝の意を込めて、同神社に和歌を奉納しました。忌宮神社には、このほかにも、足利直義、足利直冬、斯波高経が奉納した和歌が残っています。

また、下関市の住吉神社には、連歌師の宗祇が奉納した百首和歌の短冊が残っています（写真1）。これは、十五世紀末に、宗祇が中心になって編さんした准勅撰の連歌集「新撰菟玖波集」の完成を神に感謝するために同神社に奉納したものです。

このように、中世には神社に和歌を奉納することが多くありました。

では、なぜ、人々は和歌を神社に奉納したのでしょうか。



写真1 住吉社法楽百首和歌短冊
(冒頭部分 / 住吉神社蔵)

和歌のもつ宗教性

日本では、古くから「言霊信仰」があり、言葉にも霊が宿ると考えられていました。

十世紀初めに成立した最初の勅撰和歌集の「古今和歌集」の仮名序で、紀貫之は次のように記しています。「ちからもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれ

とおもはせ、おとこ女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なぐさむるは歌なり。」（『日本古典文学大系』8）

これも、「言霊信仰」を背景に和歌の特徴を記したものであるでしょう。

中世になると、和歌に対するこのような考え方がより強くなります。鎌倉時代後期に無住道暁の著した仏教説話集の「沙石集」には、次のような記述が見られます。

「和歌ノ一道ヲ思トクニ、散乱麤動ノ心ヲヤメ、寂然静閑ナル徳アリ。又言スクナクシテ、心ヲフクメリ。総持ノ義アルベシ。総持ト云ハ、即陀羅尼ナリ。」

「日本ノ和歌モ、ヨノツネノ詞ナレドモ、和歌ニモチテ思ヲブレバ、必感アリ。マシテ仏法ノ心ヲフクメラシムルハ、無疑陀羅ニナルベシ。」

「神明又多ク歌ヲ感ジテ、人ノノゾミヲ令レ叶給。旁和歌ノ徳、総持ノ義、陀羅尼ト一ニ心ウベシ。」

「神明仏陀ノ和歌ヲ用給事、必ずコレ真言ナルニコソ。」（『日本古典文学大系』85）

このように、中世においては、和歌を神仏に奉納し、祈ることによって自らの願いを成就したり、神仏に感謝しようとする考え方が広まっていたようです。

冒頭に記した奉納和歌も、このような文脈の中でとらえることができるでしょう。そこから、中世を生きた人々の心の様子を窺うことができるかも知れません。

連歌の盛行

中世を代表する文芸の一つに連歌があります。連歌は、何人もの人が発句に続けて句を詠み継いでいく「座」の文芸です。連歌は、鎌倉時代後半から室町時代にかけて大流行しました。

「建武の新政」の頃に作られた「二条河原落書」の中にも「此頃都ニハヤル物」の内の一つとして「京鎌倉ヲコキマセテ 一座ソロハ又エセ連歌 在々所々ノ歌連歌 点者ニナラヌ人ソナキ」と挙げています（「建武記」『日本思想大系』22）。このような連歌の盛行を背景に、十四世紀の半ばには「菟玖波集」という連歌集

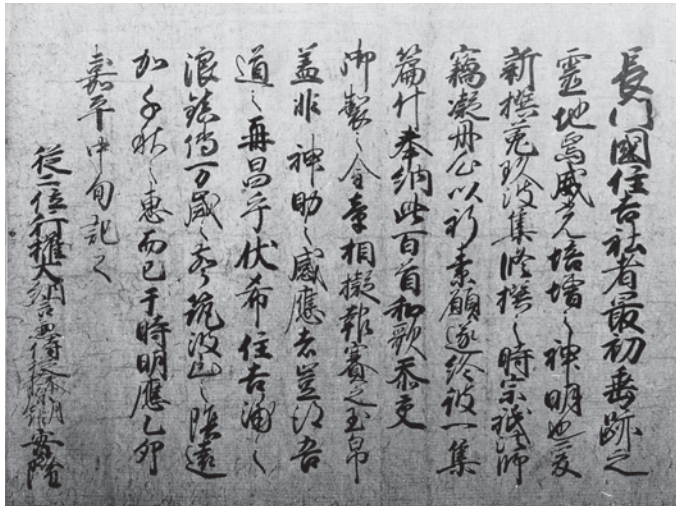


写真2 住吉社法楽百首和歌短冊 三条西実隆序文（住吉神社蔵）

が編さんされました。その後、「菟玖波集」に次ぐ連歌集の編さんが企図されます。その中心となったのが宗祇であり、強力にバックアップしたのが大内政弘です。

宗祇は、和歌の神様ともされる住吉神社に、編さんの成功を祈願します。そして、紆余曲折の末、新しい連歌集が完成しました。それが、「新撰菟玖波集」です。残念ながら政弘はその完成を見ずに他界してしまいましたが、彼の句は七五句収録されています。そのほかに、大内持世、大内教弘や大内氏家臣の句も収録されています。

宗祇は、先に記したように「新撰菟玖波集」の完成を神に感謝して、住吉神社に和歌を奉納しました。これは、後土御門天皇をはじめ三〇人の詠んだ和歌を短冊に記して奉納したもので、三条西実隆の序文も併せて奉納されています（写真2）。

和歌・連歌を介したネットワーク

このように、和歌や連歌を介して、人々のネットワークが広がっていったというのも、中世の一つの特徴かも知れません。

十五世紀に活躍した歌僧の正広という人物は、寛正五年（一四六四）三月末から同年の九月末まで山口に滞在しています。その間に五月から六月にかけては九州を歴訪しています。

正広の歌集「松下集」の中の詞書に注目すると、山口に滞在している間に、大内教弘や息子の政弘、大内氏の家臣などと頻りに和歌会が開

かれていたことがわかります。

このほかに、当時、山口を訪れた中央の文人などの残した歌集を見ると、和歌や連歌の会が頻りに開かれ、大内氏歴代当主や家臣たちが中央の文化人などと交流していたことが窺えます。時には、大内氏の支配の永続を祈る法楽和歌が神社に奉納されることもありました。

和歌や連歌によって築かれた人的ネットワークは、政治的な役割を果たすこともあったようです。

大名と和歌・連歌

室町・戦国時代の大名といえは武骨なイメージを持つ人もいるかも知れませんが、必ずしもそうではないのです。多くの大名やその家臣たちは、和歌・連歌をはじめとして文芸の素養も高かったのです。

それは、今まで記したように、和歌・連歌をはじめとする文芸の素養が、人的ネットワーク作りにも役立ち、それが、政治的にも役立つことがあったからと言うこともできるでしょう。

大内政弘は「拾塵集」という優れた歌集を残しています。毛利元就も優れた和歌や連歌を多く残しています。

戦いに明け暮れていたばかりではない大名たち。高い文芸的素養。すこしイメージが変わったのではないのでしょうか。

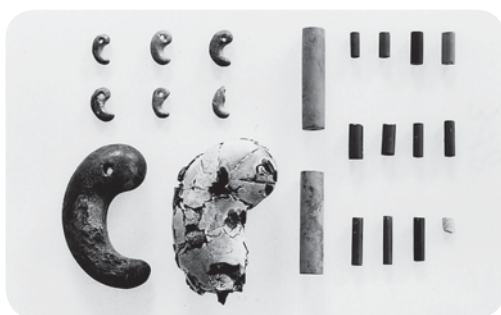
（今地）

『通史編』を編む

『通史編 原始・古代』の原始関係（岩宿・古墳時代）は、計二〇名で執筆にあたります。

日常生活はもとより、生産・埋葬・交易・まつりなど、様々な場面で使用された道具や地面に残された痕跡こんせきから人々は何を考え、どう行動したのか鳥瞰ちまかんします。県土山口の時代史を紐解く手引書となるよう心がけます。

（担当 河村・徳本美）



勾玉（まがたま）の形の意味するもの

古代部会

大楠の枝から枝へ青あらし

この句は、種田山頭火が下関市豊浦町川棚のクスクスの森（天然記念物）を見て詠んだ句です。

六三〇年から中国の唐に使節が派遣されるようになります。交通手段は船弥生時代以降、大船建造にはクス材を利用していたと言われています。川棚のクスクスの森は、当時の造船建材の可能性が指摘されています。

山口県では周防国で七〇二年出発の遣唐使船建造記事が『続日本紀』で確認できます。（担当 石風呂・山本）



百聞は一見にしかず

中世部会

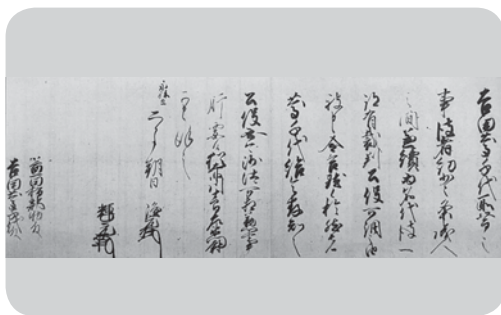
幻の父子連署書状

下の写真は、益田兼統かねむねを吉田慶千代の名代と認める内容の毛利隆元書状です。注目すべきは、隆元と並んで、息子の輝元が署判していることです。

輝元（幼名幸鶴丸こうたけまる）は隆元没後の永祿八年に元服して輝元と名乗ります。

つまり、輝元が隆元と連署することは不可能なのです。おそらく輝元は、父隆元の判断を追認し、その署判の横に自らの署判を加えたのでしょう。

（担当 今地・吉田・高橋）



毛利隆元書状（益田市立雪舟の郷記念館蔵）

近世部会

いろんな人がいっぱい

かつて小串浦こくし（現下関市豊浦町）の人々は、浜田（島根県）や対馬・五島（長崎県）で大敷網漁をおこなっていました。なかには他国の経営者に、その技術を買われて出向く人もいました。

このほか、次年度刊行予定の『史料編 近世4』（経済2）には、往時の山口県に生きた人々の経済活動が具体的にわかる史料をたくさん取り上げています。ご期待ください。

（担当 河本・松島・宮崎）



小串浦庄屋文書

近代部会

雑誌からのアプローチ

『史料編 近代』の編集過程で、新聞とともに時代の流れをつかむ大きな手がかりとなるのが、様々な団体の発行した会報や機関誌などの雑誌です。収録された特集記事・論説・投稿などに注目してみると、政治・経済をはじめ、当時の各界の動向や最新の話題が鮮明に浮かびあがってきます。県内発行誌に加え、県外発行誌にも注目して、山口県関連の雑誌記事の網羅的な収集を継続しています。

(担当 浅川・徳本敦・伊藤恵)



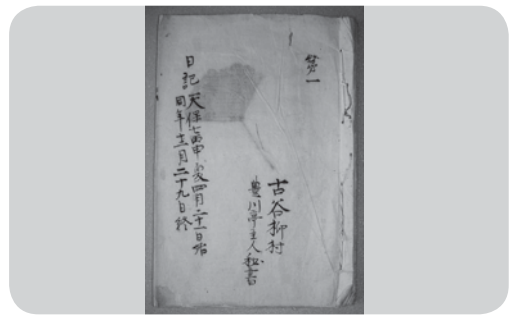
『近代5』収録予定雑誌（県立山口図書館蔵）

明治維新部会

「古谷道庵日乗」

幕末維新时期、長府藩領の豊浦郡宇賀本郷で、地域医療や教育活動に従事していた古谷道庵は、天保七年から明治十一年までの四二年間で、一一五巻にも及ぶ日乗（日記）を書き記しました。ちなみに、この日記は、昭和六十一年梅雨期の大雨などにより破損した古谷家宅の土蔵を解体作業中、偶然発見されました。それは、激動の時代に生きた民衆の姿を浮き彫りにしてくれる貴重な史料として注目されています。

(担当 土井・異谷・宮本)



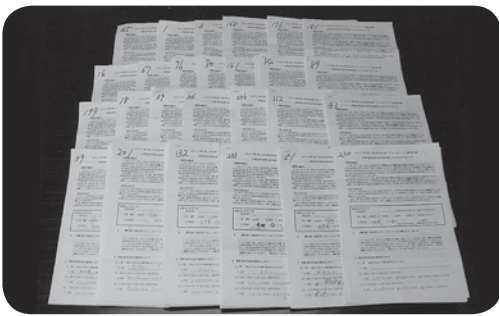
「古谷道庵日乗」第一巻（下関市所蔵）

民俗部会

アンケートの実施

民俗部会では、JA山口の各関係者の御協力を得て、昭和三十年以前の農業の在り方や水田の利用法、季節・天候の言い伝え等に関するアンケートを実施し、多くの御高齢の方々から貴重な回答を得ることができました。結果を集約・分析して、伝統的な農村生活の技術や知恵を記録しつつ、山口県の民俗の地域性を次回刊行の『民俗編』の中で明らかにしていきます。

(担当 川上・小本)



寄せられたアンケート用紙

現代部会

議会会議録

『史料編 現代4』関係の調査のために県や市町村の議会の会議録の原本を見ると、記録担当者の丁寧な仕事ぶりに驚くことがあります。特に敗戦後の混乱期のさ中に書かれ、丁寧な書体で訂正箇所もほとんどない手書きの会議録を見ると、復興に向けた真剣な議論もさることながら、記録担当者の仕事ぶりがしのべられます。

(担当 関谷・古屋・村里)



昭和二十一年秋市議会会議録

故郷に、「還りたい」

絵本作家 ぶりや かよこ



私の故郷は、かつて周防国府のおかれた、「防府」である。有史以来、先人達の築いた遺構が数多く残るこの地に生まれ、高校卒業までの日々を過ごした。我家は山と田んぼに囲まれ、当時まだ人家も疎らな不便な片田舎。幼い私には防府の街は遙かに遠い別世界であった。そんな物心がつき始めたばかりの頃の、今でも瞼に鮮やかな故郷での記憶がある。それは菅原道真公ゆかりの「天神様」の祭である。黒山の人だかりの中、父の肩車で見上げた花火、次々と夜の大空に魔法のように咲く大輪の花のなんと美しいこと！そして街中を、怒濤のように山車と裸坊がぶつかり合う誕辰祭など……、何もかもまるで夢の中。幼い私の胸は昂揚感で一杯であった。

またある日、母に手を引かれ周防国分寺を訪ねた時、仁王門の二体の仁王像に強烈な恐怖を覚え、大泣きした事がある。当然、阿吽の口元も勇猛威嚇の表情も解る訳もなく、ただ恐ろしくあの鋭い眼光に身がすくんだ。……ふと気がつくと、仁王像に静かに真向かい、合掌する母の穏やかな面差し。怖くないのかな……、母を見つめていたら、辺りに不思議な空気の流れを感じた。思わず大きな溜息が出た。怖さがすーと消えていった。……今思うと、あの時の感覚は私の中で無意に芽ばえた、初めての畏敬の念だったのかも知れない。

その後上京し、東京の生活も随分長くなった。けれど私は年齢を重ねるにつれ、何かと故郷を、山口県を意識し思ひ出す。昔なじんだ人々や、歴史の香り豊かな佇まいが偲ばれる。故郷に帰りたい。そこにはきつと、母の懐にいたような深い安堵を覚えるだろう。そしてまた、いつか先人達の足跡を辿ってみたい。維新の志士達の心に触れたい。私が日本で一番美しいと信じている、瑠璃光寺の五重塔を仰ぎ見たい。そして美しく蘇ったという周防国分寺の御仏に、あの仁王像に心静かに合掌したい。

故郷に帰りたい。いつの日か故郷に、「還りたい」。(防府市出身)

地域に根ざす・22



油谷郷土文化会

本会は、「油谷町及び関係地区の郷土文化の研究推進と会員相互の親睦を図る」(会則)として、昭和四十二年に元菱海村村長、故乃美国介会長のもと、約二〇名の同志をもって発足。現在三九年目を迎えている(現会員

三三名)。その間、毎月定期研修会を軸に、地元の人々の協力のもと、町内の史跡・文化財・歴史資料等の調査研究、民話や伝承等の収集に努めてきた。

また、調査等に出かけない定期研修会は、共同課題の討議、個人研究の発表等で、研修を深めてきた。さらに、郷土の歴史・文化等を広い視野や体験から見つめ直すとして、昭和四十八年から宿泊を伴う県内外の視察旅行を毎年のごとく実施し、今年で三〇回を数える。遠くは佐渡・沖縄・韓国にも足を伸ばしている。

これらの調査研究等の成果は、昭和五十八年から刊行を開始した会誌『油谷のささやき』に発表し、意見交換や相互研修の広場としている。会誌は一般にも頒布し、広く読んでいただいている(今年二四号)。

殊に本会の業績として、現在もその成果が地域で活かされている出版物として、『油谷町の昔話』三巻、昭和五十一〜五十二年と『油谷町歴史いろはかるた』(昭和五十三年)がある。この「かるた」は、地元の絵画グループ「ぬたくり会」(福田忠会長外五氏)によって、数年がかりで、絵入りカードとして四〇組が手づくりされ、楽しみながら郷土史にふれられるとして各小・中学校、公民館、各種団体等で、今も盛んに活用されていることは喜ばしい。また、毎年、一般を対象に歴史・文化に関する講演会を開催する。(会長 前田勲)

連絡先 長門市油谷下蔵小田(会長宅)

電話 〇八三七 三三一 〇七五六

会誌 『油谷のささやき』



「郷土を見つめ直す」研修旅行 (九州国立博物館、平成17年11月1日)

見島の鬼揚子

見島は萩の北北西約四五キロメートルの日本海上に浮かぶ面積約七・八平方キロメートルの火山島です。

この見島の珍しい風習として「鬼揚子おにようす」と呼ばれる奇怪な形相のたこ綱たこがあります。

鬼揚子はぐつと口を張ってギョロリとした目が特徴の鬼の顔をクローズアップしたもので、下にはへこという紅白の縞しま模様しの尾がついています。この鬼揚子は長男が生まれた家で、その子の将来を祝福するために、空高く揚げて降りかかる悪事災難を追い払おうという縁起物です。

長男が誕生した年の年末に、家族や親戚が集まり、竹を削って骨組みを作り、和紙をはって鬼の絵を描きます。鬼揚子を高く揚げるほどその男の子が丈夫に育つと言われているので、糸の吟味はもちろんのこと、入念な製作が行われます。中には畳八枚分もある大きい鬼揚子が作られたこともあります。できあがった鬼揚子は、年が明けた正月の天気の良い日に揚げられます。ですから年の瀬に長男が生まれると、家族や親戚にとって年末年始は、大変忙しくなります。

(川上)



鬼揚子作成中



大空へ揚がる直前の鬼揚子

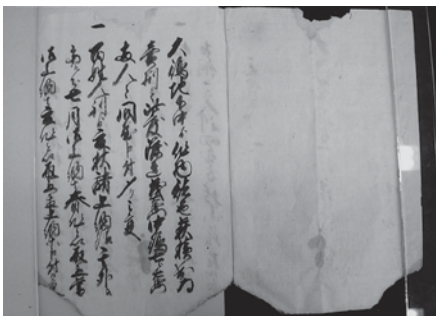
最近の調査から

近世部会では、昨年から萩市の須子家文書を調査しています。かつて城下町「萩」の港として栄えた浜崎で、酒造業や両替商を営む一方、年寄を務めた須子家。文書の一部は『萩市史』で活用されていますが、全貌は明らかになっていません。今回、須子さんの御厚意で、蔵の中の一紙物を中心とする史料を調査する機会を与えていただきました。改めて感謝申し上げます。

このほど大まかな整理ができました。主な内容は、浜崎町の年寄という役職に関係する史料、商人として商売の帳簿や取引関係の書状類、萩藩士の知行米等の売買や、武士や町人の頼母子にかかる史料等々、地域経済を支えていたことを示す史料が多数伝来しています。このほかに大量の蔵書や茶道・お花・和歌・俳諧など文化関係の史料、信仰を集めていた住吉神社の祭礼関係の史料等々、内容は多岐にわたり詳しい分析はこれからです。

県史編さん事業も後半戦に突入しましたが、出来る限り史料の収集・調査をおこなって、少しでも歴史の真実に迫りたいと考えています。「うちにもこんなもんがあるでえ。」など、どんな些細な情報でもお待ちしていますので、よろしくお願いします。

(河本)



須子家文書

県史刊行の

おしらせ

今後の配本予定巻についてお知らせいたします。

『史料編 幕末維新3』（政治・社会3）は、幕末期の政治・社会状況を明らかにするため、家老として藩政の中核にいたった浦うら敷しき負おの日記を収録します。その政務に関する記述からは、政権の内部構造や政策決定などが分かります。また、家中諸家との交際や浦家の所領経営などの記事からは、武家社会を含めた幕末期の社会状況などを把握することができます。

『通史編 原始・古代』は、冒頭に、本県の個性的な地理的環境や県土の生い立ちを叙述する「人と環境」編を設け、院政開始前（一

〇八五年）までの山口県の歴史的な歩みや特性等を叙述します。

引き続き、『史料編 中世4』（県内文書3・県外文書・文学資料）、『史料

編 近世4』（経済2）、『史料編 近代5』（産業・経済2）、『史料編 現代

4』（産業・経済）も刊行の予定です。

どうぞご期待ください。

こちら 県史編さん室

去る九月十六日、山口市の「ぱ・る・るプラザ山口」を会場に第一五回山口県史講演会を開催しました。講師は、山口県史編さん委員・中世部会長の秋山伸隆先生（県立広島大学教授）で、「文書からみる毛利元就の時代

防長中世文書の世界」と題して講演さ

れました。この講演の概要は、来年三月発行の『山口県史研究』第一五号に掲載する予定です。

『山口県史』および『山口県史研究』のお申し込みは、左記あてにお願いいたします。

〒七五三 八五〇一

山口県刊行物普及協会 電話（〇八三）九三三 二五八三

山口県刊行物普及協会 電話（〇八三）九三三 九一三九

FAX（〇八三）九三三 九一三九

山口県史の構成・刊行計画（全42巻）

【通史編】 6巻

18 原始・古代
中世
近世
幕末維新
近代

【民俗編】 1巻

【史料・資料編】 33巻

既刊 考古1（原始）
既刊 考古2（古代以降）
既刊 古代（古代史料）
既刊 中世1（記録）
既刊 中世2（県内文書1）
既刊 中世3（県内文書2）
既刊 中世4（県内文書3・県外文書・文学資料）
既刊 近世1（政治1）
既刊 近世2（政治2）
既刊 近世3（経済1）
既刊 近世4（経済2）
既刊 近世5（文化）
既刊 近世6（諸家文書1）
既刊 近世7（諸家文書2）
既刊 幕末維新1（政治・社会1）
既刊 幕末維新2（政治・社会2）
18 幕末維新3（政治・社会3）
幕末維新4（政治・社会4）
幕末維新5（経済）
既刊 幕末維新6（軍事）
幕末維新7（文化）
既刊 近代1（政治・社会・文化1）
既刊 近代2（政治・社会・文化2）
既刊 近代3（政治・社会・文化3）
既刊 近代4（産業・経済1）
既刊 近代5（産業・経済2）
既刊 現代1（県民の証言 体験手記編）
既刊 現代2（県民の証言 聞き取り編）
既刊 現代3（言論・文化 プラング文庫）
既刊 現代4（産業・経済）
既刊 現代5（政治・社会）
既刊 民俗1（民俗誌再考）
既刊 民俗2（暮らしと環境）

【別編】 2巻

統計
年表・索引
を付けた数字は刊行予定年度

山口県史だより 第23号

平成18年10月6日発行

編集・発行 / 山口県県史編さん室

〒753-8501 山口市滝町1番1号

TEL 083-933-4810

FAX 083-928-2705



講演中の秋山先生